妊娠前に検査 母子感染防げ

身に表れることがあり、第2期症状と呼ばれる。

□　□

性感染症皮膚科のある「そねざき古林診療所」（大阪市）の古林敬一医師によると、梅毒患者は第1～2期の症状や、感染不安から受けた血液検査で陽性を知るなどして治療につながることが多い。だが、症状の出方には個人差がある。

古林氏は「第1～2期の症状は無治療でも自然に消えることがある。症状が出ない人もおり、無自覚のまま感染を広げてしまう恐れもある」と指摘する。

検査で感染が判明すれば、ペニシリン系抗菌薬（抗生物質）の服用や注射で治療できるが、きちんと治療しない限り病原菌は体内で増え続け、脳や心臓などに重い症状が出ることもあるという。

□　□

感染が拡大する中、先天梅毒と診断される子供も相次いでいる。

感染研によると、先天梅毒と診断された子供は近年20人前後で推移。今年は10日4日現在で32人と、現在の調査方法となってから最も多かった元年の23人を上回る。

胎児が先天梅毒となると死産や流産につながる恐れがあり、出生後に神経や脳などに異常をきたすこともある。

妊婦健診では妊娠初期に梅毒検査が行われるため、治療につなげることはできるが、母子感染のリスクが完全に消えるわけではない。検査を受けないケースも存在する。

日本大医学部の川名敬主任教授（産婦人科）は「梅毒の母子感染を防ぐには、妊娠前に必要な治療を終えておくことが極めて重要」と指摘。「妊娠を希望しているが、これまでに梅毒を疑う症状があったり、感染への不安を持っていたりする方は、パートナーとともに検査を受けてほしい」と話している。（三宅陽子）

梅毒患者の主な症状

感染から1～4週間後ぐらい（第1期症状）	■性器、口など感染した部分にしこりや潰瘍ができることがある
感染から4～12週間後ぐらい（第2期症状）	■体や手足など全身に赤い発疹（バラ疹）が表れることがある

※第1～2期に表れる症状は、無治療でも自然に消えることがある

感染から数年～数十年（後期）	■皮膚や筋肉などにゴムのような腫瘍ができることがある ■心臓や脳などに重い症状が出ることも
先天梅毒	■死産や流産につながる恐れ ■生まれてくる子の神経や脳などに異常をきたすことも

治療と予防

治療	■ペニシリン系抗菌薬（抗生物質）の服用や注射
予防	■コンドームの適切な使用

※厚生労働省の資料などを基に作成